

## 「山梨デザインカンファレンス 2025 in 富士吉田」レポート

### 未来の“形”へつなぐためのワークショップ

2つのパネルディスカッションを終え、最後に会場で参加した全員でおこなったワークショップでは、自由な発想が次々と飛び出しました。テーマは「こんなことを富士吉田で実現できたらいいんじゃないか」。山梨県デザインディレクターの林千晶による進行の下、4~5人で構成したチームごとにアイデアを書き出し、配られた模造紙に付箋を貼り付けながら個々の考えをひとつにまとめていきました。参加者それぞれの専門性や得意とする領域から提示された案はどれも現実的で、これからの富士吉田の発展をさらに期待するものばかりです。ここでは全8チームによるプレゼンテーションの様子を振り返ります。

### チーム1：「芸術と産業の間」

大きくも小さくもなく、同じ目線で情熱をもって取り組むための仕組みをつくりたい。自分たちも楽しみ、相手にも楽しんでもらいながら新しいことを進めていく。



## チーム2：「ものづくりのワクワクを広げる」

誰にも共通するワクワク感を求心力に、とりわけ子どもたちに体験してもらおう祭をつくる。アーティストとのコラボレーションがブレイクスルーのきっかけにできるのではないかと。



## チーム3：「森を活かす」

テキスタイルの原料は自然のものから取り入れるが、実際には詳しくない。森に目を向けることで、衣食住に展開できると考える。



## チーム4：「デザイナーが職人になる」

すべてにおいて越境するならば、デザイナーが職人になってみる。縫製の仕事のように、手を動かすのを楽しめるはずだ。



## チーム5：「つくれる場／教育の場／体験の場」

3D プリンタやファブカフェによって身近になったものづくりを、発表する場も自らの手で用意してみる。富士山でファッションショーを開くこともできそう。



## チーム6：「機屋さんの残布で染め物体験」

子どもたちを対象に、布は自分たちの手で染められることを体験してもらう。



## チーム7：「知る→作る→暮らす」

入り口がたくさんある街をつくりたい。表面には見えないものを感じてもらい、最後には住宅なるような仕組み。



## チーム 8：「中心地がほしい」

かつて富士吉田の街にあった映画館やレコード屋のカルチャーが、いまは失われてしまった。子どもたちに向けたコンテンツをつくり、記憶に残していきたい。



そしてもう 1 チーム、「フジテキスタイルウィーク」で作品を発表したアーティスト、ジュリエット・ベルトノーさんとシン・チュー・シンさんのふたりも会場で参加していました。



▲右からシン・チュー・シン氏、ジュリエット・ベルトノー氏

「アーティストインレジデンスで1ヶ月ほど富士吉田に滞在し、共同プロジェクトで制作した作品を発表していますが、もっと長く滞在したいし、機屋についても知りたい。そしてできればフランスへも来てほしいです」と話したのはベルトノーさん。会場からは、「海外アーティストがもっとアクセスしやすい街にしたい」、「いまはトライアルだけど、これからは国際的なテキスタイルウィークにできるはず」といった意見も聞かれ、林千晶ディレクターは「みなさんが主体的に考えたことが素晴らしいと思います。今日のパネルディスカッションとワークショップをきっかけに、実現しましょう。ここから実際の“形”に変えてきましょう」とまとめました。

テキスタイルの発信地として、富士吉田の産地がさらに発展する未来へのエネルギーは、ますます強まる勢いを感じさせています。